



国際機関実務体験プログラム 修了者追跡アンケート 調査報告書 (概要版)

編集・発行：公益財団法人 横浜市国際交流協会 (YOKE)

はじめに

公益財団法人 横浜市国際交流協会（YOKE）では平成 16 年（2004 年）6 月に、横浜市国際協力センター（西区みなとみらい 1-1-1、パシフィコ横浜）への移転を契機に、横浜市が誘致している国際機関と市民とをつなぐ事業を進めることになりました。

YOKE では、次世代を担うグローバル人材育成の観点から、国際機関の協力を得て、国際機関の取り組みを学生達が実務を通して体験的に学ぶ「国際機関実務体験プログラム」を平成 16 年度からスタートしました。このプログラムでは、年に 2 回、夏休み（8 月～9 月）と春休み（2～3 月）にそれぞれ 100 時間のインターンシップの機会を提供しています。

対象となる学生の選考にあたっては、YOKE と協定を結ぶ市内の 4 大学の協力をいただき、学内で国際協力・交流に関心を持ち、将来国際機関で働きたい若しくは国際協力の分野で仕事をしたいと考えている学部生や院生を公募で選抜しています。

このプログラムを修了した人の中には、その後、海外へ留学した人、青年海外協力隊員としてアフリカに行った人、NGO 職員として途上国事務所の駐在員となった人もいました。

平成 24 年度夏期までの修了者が 100 名を超え、このたび「国際機関実務体験プログラム修了者追跡アンケート調査」を実施しました。この調査は、プログラム修了者にその後の進路やプログラムが与えた影響や効果などについてアンケートを行ったもので、この調査結果を踏まえ、今後のプログラムをより良くしていきたいと考えています。

今回、アンケートにご回答いただいた修了者の皆さま、インターンシップの場をご提供いただいている国際機関の皆さま、そして学生の選考にご尽力いただいている大学関係者の皆さまに厚く御礼申し上げますとともに、引続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。

受入れ 協力機関	国連食糧農業機関(FAO)日本事務所、国連大学高等研究所(UNU--IAS)、 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(IUC) 独立行政法人 国際協力機構 JICA 横浜、 アジア太平洋都市間協力ネットワーク(CITYNET)、 国連 WFP 協会*、アンスティチュ・フランセ横浜(旧横浜日仏学院)*、 公益財団法人 横浜市国際交流協会(YOKE)
協定大学	明治学院大学、横浜国立大学、フェリス女学院大学、横浜市立大学

注) 上記の受入れ機関と大学名は、プログラムスタート順で記載。但し*の 2 機関は、現在受入れは行っていません。

◆「国際機関実務体験プログラム修了者追跡アンケート 調査報告書」

目 次

I. アンケート調査の概要.....	P. 3
1. 調査の趣旨・目的	
2. 調査の概要	
3. 調査期間	
4. 調査方法等	
II. アンケートの調査結果.....	P. 4
Q 1 基礎データの集計	
Q 2 大学生活への影響	
Q 3 就学選択への影響	
Q 4 就職選択への影響	
Q 5 職場や学業で役にたった研修内容	
Q 6 終了後の社会貢献活動の有無	
Q 7 国際機関・YOKE 等との関係維持	
Q 8 国際機関の活動への今後の参画	
Q 9 同期、先輩・後輩との関係維持	
Q10 参加して一番良かった点	
◆添付資料	P. 16

I. アンケート調査の概要

1. 調査の趣旨・目的

平成 16 年度春期からスタートした「国際機関実務体験プログラム」は、平成 24 年度夏期に、プログラム修了者が 100 名に達しました。これを機会に、プログラム修了者の現状を知ると同時に、その後の進路やプログラムが与えた影響や効果を調査し、今後の活動に活かすために実施しました。

2. 調査の概要

- (1) プログラム終了後の進路等について (Q1)
- (2) 大学生活・進学・職業選択への影響について (Q2、3、4)
- (3) プログラムの効果等について (Q5、6、8、10)
- (4) 関係機関等との関係維持について (Q7、9)

3. 調査期間

- (1) 第 1 次調査：平成 23 年 12 月～平成 24 年 3 月
対象：平成 16 年度春期学生（第 1 回）～平成 23 年度春期学生（第 15 回）
- (2) 第 2 次調査：平成 24 年 10 月～平成 24 年 12 月
対象：平成 24 年度夏期学生（第 16 回）及び第 1 次調査で回答のなかった方

4. 調査方法等

- (1) 調査方法：アンケート用紙のメールによる送付と回収
- (2) 調査対象：平成 16 年度春期学生（第 1 回）～平成 24 年度夏期学生（第 16 回）のプログラム修了者 100 名（詳細 P.37 参照）
- (3) 回答状況：回収件数 71 名（回収率 71%）

II. アンケートの調査結果

Q1 基礎データ：現在の状況について（対象者：回答者 71 名）

1. 現在、就業中でしょうか、それとも就学中でしょうか？

今回の回答者 71 名中、「就業中」との回答者は、全体の約 41%にあたる 29 名でした。
「就学中」との回答者は全体の約 59%にあたる 42 名でした。

2. 就業中の方は、現在どのような職業についていらっしゃいますか？

◆就業者：29名（41%）の内訳

	ジャンル	合計	%
1	会社員	15	52
2	公務員	3	10
3	教員	3	10
4	大学職員	3	10
5	その他	3	10
6	NPO/NGO 職員	1	4
7	自営	1	4
	合計	29	100

3. 就学生の方は、現在どのような所属でいらっしゃいますか？

◆就学生：42名（59%）の内訳

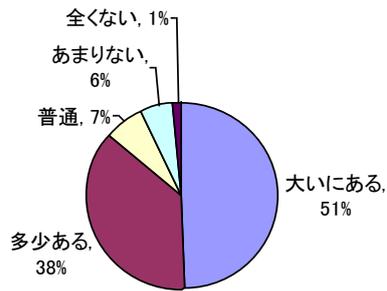
	所属	合計	%
1	学部生	34	81
2	修士課程（留学中で修士課程の人を含む）	6	14
3	博士課程	2	5

4. 現在、ボランティア活動をしていますか？

- 「はい」と回答した人は、24%にあたる 17 名。中には、複数のボランティア活動にかかわっている人も見受けられた。また、このプログラムで地域のボランティア活動に触れたことがきっかけで、国際交流ラウンジで外国籍生徒の学習支援を週末や夏休みに継続的に行っている学生や、大学ボランティアセンターが実施する東北被災地支援のプロジェクトに参加し、被災地の活動に触れた学生、キャンパス内で障害を持つ学生のノートを代筆する活動をする人等、ボランティア活動の場が途上国に限らず、また、活動内容も「国際協力」に関わらず、身近にできるところから、取り組みを始めた人も複数いたことが、顕著であった。
- 「いいえ」との回答者は全体の 65%にあたる 46 名。*「国際協力の活動に関心を持ってはいるが、現在は忙しく、ボランティア活動をしていない」との回答が見受けられた。
- 「無回答」の人は、11%にあたる 8 名であった。

Q2-(1) 実務体験プログラムへの参加は、その後の大学生生活に影響がありましたか？

プログラム参加による大学生生活への影響

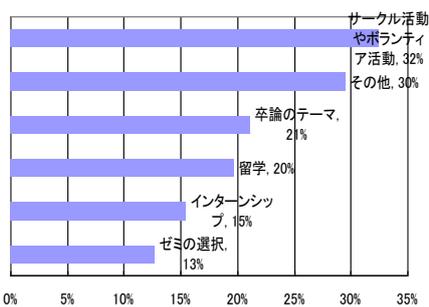


●「大いにある」、「多少ある」との回答で9割近くの修了者が影響あり、と回答している。

- *「研修で携わったテーマや研修先が扱うテーマからヒントを得て卒論のテーマを具体的に決めることができた」
- *「研修で扱ったテーマについて知識が深まったばかりでなく、パソコンスキルや事務作業等の実践、レポート・報告書の作成方法、プレゼン能力の向上など学生生活で必要とされる知識や技能の向上にもつながった」

- *「同じような進路を模索する同世代の人達と交流ができ、広い視野を得た」
- *「漠然と国際協力の分野や国際機関で働きたいと思っていたことが、英語力や専門の知識など具体的にどのような勉強をする必要があるかがわかり、方向性がはっきりした」
- *「留学の際に、推薦状を書いてもらった」
- *「社会で生きる上でのマナーを学ぶことができた」
- *「人と関わることの大切さを知り、その後ボランティア活動を積極的に行うようになった」
- *「大学院での研究レポートに国際組織の現実を反映できた」など。

Q2-(2) 上記(1)で「大いにある」、「多少ある」と回答した方は、どのような影響だったでしょうか？（複数回答）

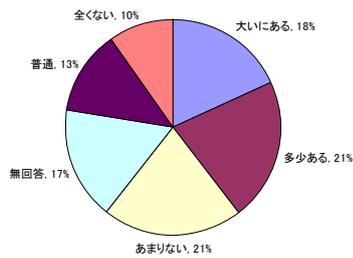


- 「将来のビジョンが明確になったとともに、英語の重要性に気づき、4年生を休学してオーストラリアに10ヶ月、ワーキングホリデーという形で語学勉強に行くことを決めた」
- 「このプログラムへの参加がきっかけで、国際協力の活動を始めた。UNHCR(国連高等難民弁務官事務所)でのインターン、英国への留学につながった」
- 「イベント運営に携わることで、人との関わりに関心

を持つようになり、研修後、積極的にボランティア活動をするようになった」

- 「授業や文献で目にする国際協力の専門用語がより具体的に理解できるようになった。理論だけでなく、質の面で国際協力を考えるようになった」
- 「開発教育の現場で知ってもらうことの重要性」を研修機関で学び、大学のサークル内で途上国の現状を知ってもらい賛同者を集める資金調達部門を創設して情報発信に努めた」
- 「アジア・アフリカからの留学生を見る視点が変わり、苦手意識を持っていた英語を駆使して積極的に交流を働きかけ、以前に比べ、深いところで交流と理解ができるようになった」
- その他、「海外に目を向けがちだった国際化の動きを日本国内や市内で起こっている事象と関連づけて考えた」、「日本を見直すきっかけとなった」や、「学業と直結しないが、海外でボランティア活動に参加する機会が複数あり、挑戦してみようという自信につながった」、「多くの人と出会い人間的な幅ができた」、「留学のレジメでアピールできた」など。

Q 3-(1) : 「プログラム」への参加は大学卒業後の進学等、就学の選択に影響がありましたか？

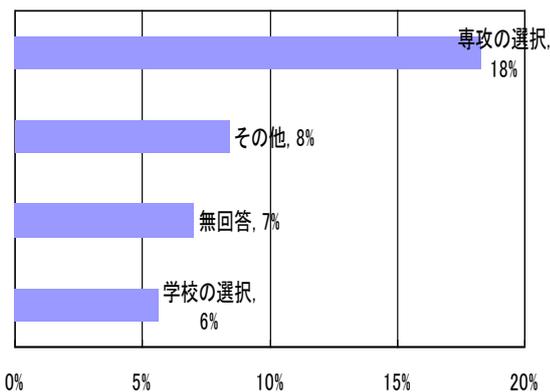


● 「大いにある」、「多少ある」と回答した人が合計で 40% :

- * 「研修中に痛切に感じた専門知識や英語力の習得のため、大学院進学や留学を決意した」
- * 「研修先の職員やプログラムで出会った方々のお話から、進路が広がった。」
- * 「進学するかどうか迷っていたが、ひとまず社会に出たいという気持ちが強くなった」

- * 「国際協力には、いろいろな道があることがわかり、将来の進路について検討してみたいと思う」
- * 「さまざまな視点から物事を見るようになり、この経験が将来を考える上での貴重な財産になると思う」
- * 「『人との出会いや人の成長に多く関われる仕事』という仕事を探す上での軸は、研修先でのインターンシップが大きな要素となって形成された」
- * 「アメリカ人の学生の積極性に触れ、社会経験を積んでから必ず留学したいと思うようになった」
- * 「同じ志を持つ友人に出会い、いい影響をもらい、刺激になっている」
- * 「大学院の授業の中で国際機関での研修経験を事例報告できた」
- * 「留学や進学の際、このプログラムへの参加がアピールポイントになった」など。

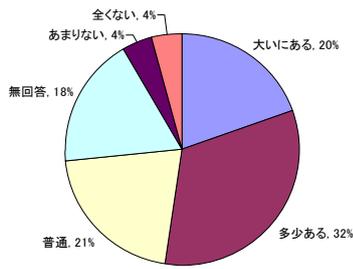
Q 3-(2) 上記(1)で「大いにある」「多少ある」と回答した方は、どのような影響だったでしょうか？



- * 「研修先で携わったテーマがヒントとなり、具体的なテーマを絞ることができた」
- * 「研修先でさまざまな研究に触れたことが、大学院でのジェンダー研究を選ぶきっかけとなった」
- * 「研修先で興味をもった『マイノリティー文化』について、国際社会学（移民）及び文化人類学（先住民）のゼミを選択することを決めた」
- * 「自分が取り上げた『共生』のテーマをもっと深める選択ができた。」
- * 「途上国の開発系の道に進む決意」

- * 「就職するべきか、進学するべきか迷ったがやはり『開発』をやりたいと決断するきっかけになった」
- * 「大学院に進学する決意を固めた」
- * 「国際関係を専攻し、米国の大学に進学した」
- * 「インターンへの参加は履歴書でも十分なアピールポイントになった」
- * 「米国人学生の勉強に対する積極性に触れ、経験を積んで必ず留学したいという思いが明確になった」
- * 「進学するかどうか迷っていましたが、ひとまず社会に出たいという気持ちが強くなった」
- * 「困っている人々を支援する立場、直接的な支援を行いたいという気持ちは今でもあるので、それをいかに仕事にしていくか、考えるきっかけとなっています」
- * 「会社に就職し、部署内で職種の希望を出す際、非常に経験が役にたった」など

Q 4-(1) 「プログラム」への参加は大学卒業後の就職の選択に影響がありましたか？

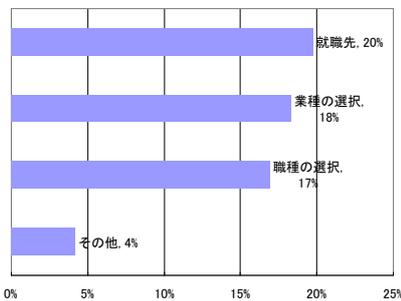


●「大いにある」、「多少ある」の合計者数が半数以上の52%：

- * 「大学院へ進学する気持ちがより強くなった」
- * 「研究者になりたいと強く思うようになった」
- * 「研修先でのインターン中に知った企業や研究を通して、国際協力の仕事につきたいと思い、就職試験を受けた」
- * 「『仕事をする自分』を想像できるようになった」
- * 「研修先で行った広報活動に興味があり、広告業界に就職した」

- * 「研修内容が充実していたので、働くことに対し意欲が上がり、就活を前向きな気持ちで精力的に取り組めた。仕事のやりがいはお金をもうけることではなく、第一に、自分の興味のあることや、やりたいことを実現し、人や社会の役にたつことだと気づけたことが大きな収穫になった」
- * 「人と分かり合うためのコミュニケーションの重要性を再認識できたので、コミュニケーションを主とする職種を探すことができた」
- * 「YOKEのように在住外国人の手助けをする機関で働いてみたいと思った。留学もして、特に在住外国人と日本人、実社会とを繋げるような仕事がしたい」
- * 「あえて就職は、国際協力以外の分野に進むことにしたのは、学生時代にたくさんボランティア活動をする中で、NPO/NGO、国際機関に欠けているであろう部分を民間企業が持っていると感じたためだ。しかし、就活で企業を選択する際、CSR等の企業責任を果たしているかどうかについて着目したのは、このプログラムでの影響が大きい」など

Q 4-(2) 上記(1)で「大いにある」「多少ある」と回答した方は、どのような影響だったでしょうか？（複数回答）

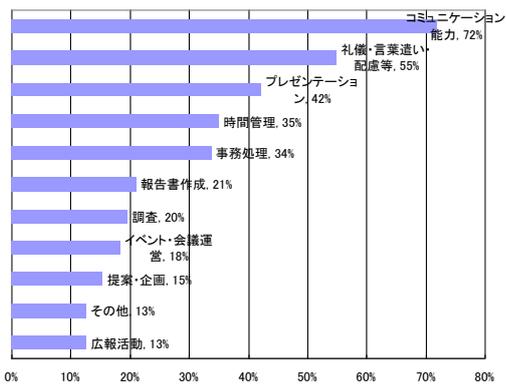


●「就職先・業種・職種の選択」との回答者が55%に及ぶほど、具体的な影響を受けていることがわかる。

- * 「以前は海外での国際協力・支援ばかりにこだわっていたが、国内でも国際協力ができること、また身近な地域での関係作りも大切だと知り、現在は横浜市で働いている」
- * 「就職先の選択肢が広がった」
- * 「仕事で実際にお給料をいただくという意欲が高まった」
- * 「自己実現を第一に考えて、就職先を決定できた」

- * 「研修先の職員の方の働き方が自分の将来の役にたつ」
- * 「プログラムの中で、人と関わる機会が多く、相手の立場で多角的な視野で物事を考えることの大切さを知り、人の役に立つ喜ばせる仕事がしたいと思い、教育業界を志望」
- * 「研究機関よりむしろ現場に近い方が自分には向いていると認識するようになり、企業に就職した」
- * 「あえて国際協力以外の分野に就職することに決めたわけは、学生時代にたくさんボランティア活動を経験したことで、NGO/NPO、国際機関に欠けている部分を民間が持っていると感じたことがきっかけだった。但し、企業を選択する際の物差しとして、CSR等の企業責任を果たしているかどうかを着目した。そのことは、このプログラムの影響が大きい」
- * 「教員になったが、自分を通して、国際協力・国際機関に目を向けてもらえたらと思う」

Q 5 具体的に「実務体験プログラム」のどのような業務内容が現在の職場や学業・研究面での活動に役にたちましたか？（複数回答）



●コミュニケーション能力について

* 「感じのよい挨拶、知らない人に対しすぐに挨拶できるようになり、自然になった。また、仕事を行う上でコミュニケーション能力はとても重要な要素であると実感した」

●礼儀・言葉遣い・配慮等について

* 「忙しい中でも周囲の人達に気を遣い、マナーを守るのが職場だと知った。仕事を行う上でコミュニケーション能力はとても重要な要素であると実感した」

●プレゼンテーション力について：* 「調査から報告までの流れを研修中にしっかり指導を受けたので自信がついた。その後、学内でも報告会を開くことができた。また、大学の研究にも役立っている」

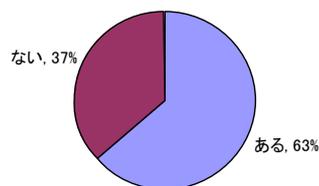
●時間管理について：* 「時間と役割を与えられた中で成果を求められ、自分の力で切り開くことが求められる。できない場合は、相手に迷惑をかけないようできないことを早く伝えることが大切だ」

●調査：* 「現在、青年海外協力隊員で西アフリカ・ベナンの灌漑状況について調査をしているが、研修先で同じ西アフリカのマリの灌漑について調べたことがあったので、調査のやり方がわかった」

●事務処理について：* 「会議運営の手伝いをする中で、仕事の流れを次に起こることを予想して準備をしておく、機転を利かせるなど、言われなくても自分から気づいて動くことが大切だとわかった」

●その他：* 「仕事は待っているばかりでなく、自分の関心を伝えることの大切さを学び、自分から声をかけることで、仕事が増えていくことを体験した。文化背景の異なるスタッフが一緒に働くグローバルな職場では、日本的な考え方では通用しないこと、コミュニケーションをとりながら、絶えず確認しながら作業をすることの大切さを肌で感じた」など

Q 6-(1)「実務体験プログラム」終了後、国際交流・協力活動や企業のCSR活動、ボランティア活動（国内・海外）等に参加したことがありましたか？またどのようなことがきっかけでしたか？



●研修先や大学ボランティアセンター・YOKE など

* 「YOKE や研修先担当者から直接声をかけてもらった」

* 「YOKE の地球市民講座、WFP が行うチャリティーイベント、セミナー等の運営協力で声をかけてもらった」

* 「研修先である CITYNET の活動を理解し、応援するための学生サークル“CITYNET YOUTH!”を立上げ、勉強会やステイターの実施を行っている」

* 「大学ボランティアセンターを通じて知った」

●その他のきっかけ

* 「ボランティアではないが、積極的に海外でインターンをするようになった」

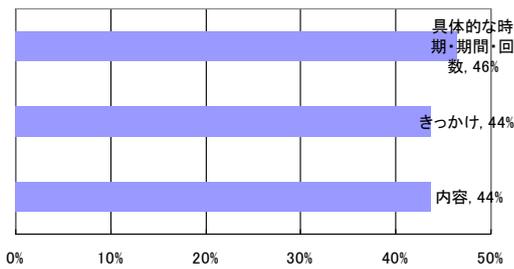
* 「知り合いの紹介や推薦、所属団体の活動、派遣プログラムの参加」

* 「国連視点での開発をインターンで経験できたので、現場視点での開発を見たいと思った」

* 「生きるベースとなる『食生活』の大切さを知り、色々な場所の状況を知りたいと思った」

* 「フィリピンに留学中に、同じ大学に留学していた友人からの紹介」

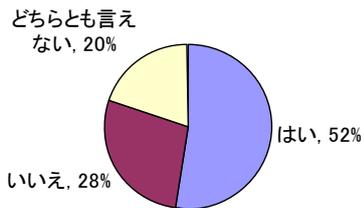
Q 6-(2) 上記(1)で「ある」と回答された方、以下に回答ください。【具体的なボランティア活動内容】(複数回答)



- インドネシア農村開発スタディーツアー
- 日中韓ユースフォーラム、グローバル模擬国連
- 内閣府事業「世界青年の船」
- 国連気候変動会議 (COP15,16)
- JICA 技術研修員対象の日本語教育
- UNDP 主催: Business for Environment
- UNIFEM、国連 UNHCR 協会での街頭募金活動

- IMF 世界総会の学生ボランティア
- 中国での植林活動・村おこし
- フィリピン大学の学生と領土問題や従軍慰安婦問題についての勉強会・ディスカッションの開催及び東京・横浜の観光ツアーの実施
- 日本語を母語としない外国人生徒の日本語教室 (多文化街づくり工房、小学校での学習支援)
- 手話サークル、聴覚障害者の学生を補助する活動 (授業中に手書きやパソコンで講義内容を伝える)
- YOKE「地球市民講座」(司会、講師の通訳、会議運営補助)
- Peace Field Japan、JOICEF
- 日韓在日交流プログラム、韓国人と川の洗浄活動

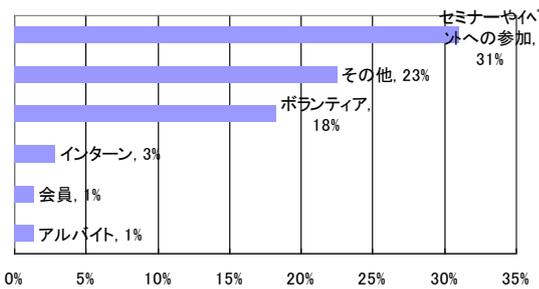
Q 7-(1)「実務体験プログラム」でお世話になった受入れ機関やYOKEを含む他の機関と今でも関係を持続していますか？



- 「はい」と回答した人は半数の 52%
- *「YOKE 主催の『地球市民講座』でのセミナー運営補助を通じて、研修先や他の国際機関の活動に触れている」
- 「受入れ機関や YOKE から声をかけていただき、参加
- *「UNU-IAS の研究発表会に参加していたが現在は忙しく参加できていない」
- *「UNU-IAS でインターンだった外国人学生や研究指導の担当者 (外国人研究者) とは会っている」

- *「研修先のイベント情報 ML に加入し、セミナー参加や会議運営のボランティア協力を継続している」
- *「FAO 日本事務所に留学先のアドバイスをいただいた」
- *「研修終了後、受入れ機関に挨拶に行き、スタッフと食事するなど情報交換を行っている」
- *「日仏学院の語学講座のパンフレットを送付してもらっている」
- *「横浜国際フェスタ」、「日比谷グローバルフェスタ」等の出展ブースで運営ボランティアをした」
- 「いいえ」と回答した人: *「研修先とはメールで何回かやりとりしただけで、殆ど連絡をとっていません」、「卒業するまではお手伝いで参加していましたが、社会人になってからは、時間の余裕がなく、参加できていません」
- 「どちらとも言えない」と回答した人: *「研修先からイベントやセミナーのご案内をいただき、参加したいのですが、就職活動が忙しく、なかなか伺えず残念です」など

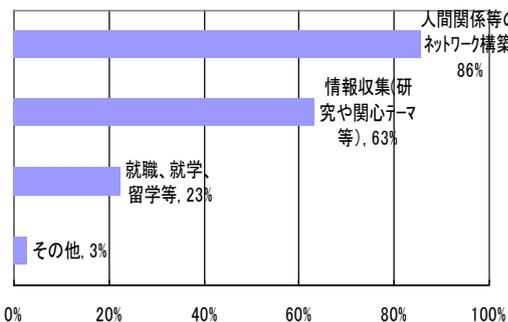
Q 7-(2) 上記(1)で「はい」と回答した方へ伺います。どのような形で、研修先とつながっていますか？（複数回答）



●「セミナーやイベントへの参加」及び「ボランティア協力」を加算すると約半数近い49%の人たちがYOKEや各機関が行うセミナーやイベントの際、ボランティアとして運営協力や参加を通じて、プログラム終了後も国際機関との関係を維持していることがわかる。「その他」の形でも継続した関わりを持つ人を加算すると、7割近い人が受入れ機関と良好な関係を維持する努力をしていることが伺える。

- * 「『YOKE 地球市民講座』に運営協力でボランティア参加し、先輩のプログラム修了生や後輩の新しいインターン学生達と知り合えた。このつながりを大切にしたい」
- * 「フィリピンへの留学が決まり、研修先のJICA 横浜を通じて、JICA マニラ事務所に紹介手続きをとっていただき、現地での研究調査の際にサポートをしていただくことになった」
- * 「研修先から声をかけていただき、イベントの手伝いをさせていただいた。大変興味深いセミナーだったので、参考にしながら将来のことを考えている」など

Q 7-(3) 研修先やYOKEとつながることで、どのようなメリットがありますか？ また、どのようなことを期待しますか？（複数回答）



●第1位：人間関係のネットワーク構築（86%）

- * 「さまざまな視点を持つ人と意見を交換することで自分の知らない未知なる世界やすぐれた情報交換ができる」
- * 「志や意欲を同じくする同世代の仲間と知り合うことで刺激を受けたり、切磋琢磨して自分を成長できる」
- * 「セミナーの参加等を通じて、情報収集や人間関係が広がり、将来の就職を考える際の参考になる」

●第2位：情報収集（26%）

- * 「研究テーマ等に関して、国際機関の方より的確なアドバイスをいただくことができた」

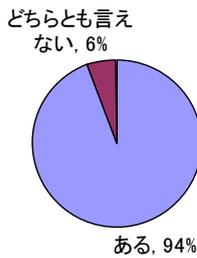
●第3位：就職・就学・留学等（23%）

- * 「進路相談や留学相談などの的確なアドバイスを頂いた」

●その他（3%）

- * 「あらゆる分野の国際的な活動・研究をしている方がおられるため、視野が広がり、今後のキャリア形成や自身の活動を考え直すきっかけとなることを期待している」
- * 「YOKEのように地域での国際協力をしているので、現場のリアルな情報を知ることができるきっかけを期待する」
- * 「サークル活動が国際問題を扱っているので、研修先での経験を活動に活かしている」
- * 「元気がなくなった時に、研修先の方と会うことで、元気になれます」
- * 「さまざまな人と出会うことで自分の能力が磨かれる。すてきな人との交流を持てる点」など

Q 8-(1) 今後とも国際機関の活動に関わりたいと思う気持ちがありますか？



● 「ある」との回答者 (94%)

- * 「将来国際機関で働きたいので、今後もインターンやイベント参加をしようと思う」
- * 「今後も機会があればセミナーやイベントの協力をしたいと思う」
- * 「社会的基礎力が身につく、国際問題への意識も高まったことで得ることが多かったため」
- * 「社会人となり今後はできる限り恩返しをしたい」

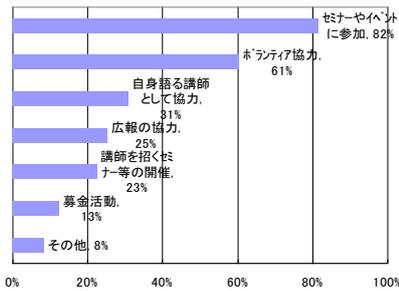
- * 「将来、国際機関で働きたいので、今後もイベントに参加したり、インターンをしようと思っている」
- * 「職場では世界の見方が固まってしまうので、国際機関の活動に触れ、広い視点を持ち続けたい」

● 「どちらとも言えない」との回答者 (6%)

- * 「社会人となり現在は、なかなか関わりが持てないが、メルマガや会報などを読んで関心を持ち続け、たまに資金提供援助をしたい」
- * 「途上国の問題を学び、わが身を振り返って見たことがきっかけで、今は日本の地域活性化に関心がある。20代のうちは、日本で何か貢献できるような力をつけられるようにしたい」など

Q 8-(2) 上記(1)で「ある」と回答された方、今後どのような形で貢献できると思いますか？

(複数回答)



● 第1位：セミナーやイベントに参加

- * 「UNU-IAS で定期的に研究者の発表会やセミナーを行っているため参加したい」
- * 「自分自身の成長にもつながるのでぜひ、協力したい」

● 第2位：ボランティア協力したい

- * 「青年海外協力隊に参加したい」
- * 「国際機関の役に立ちたい」、「セミナー参加者の喜ぶ顔が見たい」

● 第3位：自身の体験を語る講師として協力したい

- * 「留学体験や大学院進学、青年海外協力隊員としての経験といった、具体的なキャリア形成を後輩に向けてアドバイスの協力ができる」

● 第4位：広報の協力 * 「学内でポスター展示など広報の協力もできる」、「友人やサークルを通じてセミナー、イベントへの参加を呼びかけたい」

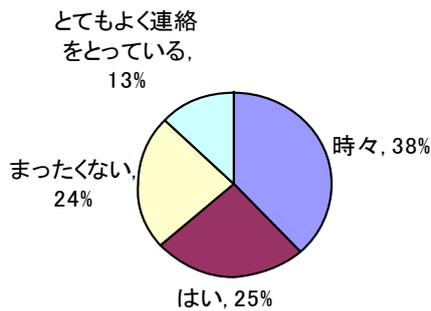
● 第5位：講師を招き、セミナーを開く

- * 「JICA の事業評価方法 PCM 手法を会社及び学校で普及させることができる」
- * 「自身が公立小学校の教員であるため学校の『国際理解教育』に YOKE を含め国際機関の職員を講師として招く機会を提供することができる。自分を含め、生徒達に大きな学びとなると同時に、自分達にできることを知る機会にもなる。自分自身が学校内で積極的に場作りに動くことで、国際機関との活動に関わりたいと思う」

● 第6位：募金活動 * 「学内で募金活動ができる」

- その他：* 「自分ができることなら、何でもしたい」、* 「国際機関で働くこと」など

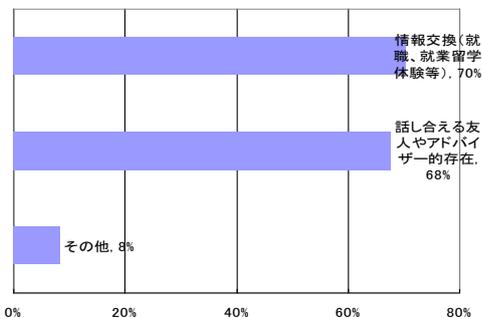
Q 9-(1) 同期や先輩・後輩との学生との連絡は続いていますか？



- 連絡をとりあっている人が8割近くと、非常に多い。反面、「まったく連絡をとっていない」との回答者も24%いる。
- 『とてもよく連絡をとっている』の回答者
 - * 「Face Book や MIXI で情報交換を行っている」
 - * 「このプログラムの参加者は意識が高いので、影響を受けて自分も頑張りたいので連絡をとっている」
 - * 「連絡を取り合い、ご飯を一緒に食べに行くことが多い」、「学内で出会う時にお話をする」
 - * 「同期の志高く活躍する姿に、良い刺激をもらっている」

- 『連絡はとりあっている』の回答者：* 「つながりを保つためにも、わからないことがあると先輩に些細なことでも、連絡をとるようにしている」

Q 9-(2) 同期や先輩・後輩の学生との交流は、どのような意味を持つでしょうか？（複数回答）



- 『情報交換(就職、就業、留学体験等)』: 70%の回答者
 - * 「就活の際に国際機関で働いた経験をもとに話しあうことができた」
 - * 「先輩との情報交換でモチベーションを高められる」
- 『話し合える友人やアドバイザー的存在』: 68%の回答者
 - * 「志高い仲間、お互いを刺激しあえる」
 - * 「先輩からのアドバイスや同期との話しあいは、目標意識を高めさせてくれた。私も頑張ろうと、いつも励みになる」

- * 「現状を教えあうことで、自身のブラッシュアップになっている」
- * 「同期の現在の活動と将来について語りあうことができ、刺激になった」
- 「その他」8%の回答者：
 - * 「現在や将来について語りあえる機会があれば、互いに刺激になる」
 - * 「休学していたこともあり、大学の同期は卒業し、友人が少なく寂しい思いをしていたので、インターンのつながりで出来た友人を大切にしたい」
 - * 「現在所属している大学のサークル活動(食料問題への啓発・募金活動)は、同じ大学の先輩OBから教えてもらった。このプログラムで繋がりを作ることができた」
 - * 「研修最終日に、同期とネットワーク強化について話しあった」
 - * 「同じ志を持つ人が集まれば、何かできるのではないかと思う」
 - * 「繋がっていれば何かしらの意味があると思う」
 - * 「会ったことがなくても、同じ実務体験をしてきた人とは何か通じ合えるものがある」など

Q10. あなたにとって「国際機関実務体験プログラム」に参加して一番良かったと思えることは何ですか？

1. 仕事への姿勢を学んだ

- * 「働くことの姿勢や責任を学ぶことができた」
- * 「100時間という濃厚な時間の中で、様々なことを学び、自分の世界がとても小さいことに気づけたことが重要だと思いました。気づきの後、自分をどのように変えれば周囲にとってメリットがあるか、必死に考えることができるようになりました。そのことで周囲に気遣いができるようになり、相手が何を求めているかを察知することができるようになりました」

2. 多文化な環境でのコミュニケーション能力・異文化理解の体得

- * 「文化背景の異なる人と働くには、日本の当たり前が通用しないことがわかった。将来企業で働く際も海外進出計画がありますが、日本での当たり前を押し付けられないような働き方をしたいと思った」
- * 「日本に文化的基盤を持たない人達と日本において協働して仕事を進める際に、注意すべき事などについての経験を積めたことです」
- * 「外国人とコミュニケーションをとることの大変さが身につく、さらにコミュニケーションをとりたいと考えるようになった」
- * 「言語はコミュニケーションツールでしかないと思えるようになり、コンプレックスがなくなり外国語を話す度胸ができました。留学先での積極性につながった」

3. 人とのつながり

- * 「感謝の気持ちを常に持ち、自分と関わる全ての人に誠意を持って接することで、自分の考えに賛同し、協力してくれる人が必ず現れることを身をもって体験し、「人とのつながりの大切さ」を改めて学んだ」
- * 「大学1年生の夏休みに知識や経験も不十分で何もわからない状態で参加し、辛いことや投げ出したいこともありましたが、人とのつながり、関わりの大切さを知り、かけがえのないものだと思います。その後の勉学、進路に影響を与えたことは確かです」
- * 「一番の収穫は人との繋がりができたこと。国際機関はそれぞれの役割が違い、そこに集まる人の想いもそれぞれであり、さまざまな考えに触れることができたと思う」
- * 「目的意識の高い仲間とつながりができ、多くのきっかけや刺激を受け、自分も将来に対し、何か行動しなくてはいけないという緊張感を得た。また、同じ意識を持つ仲間の応援でやる気が高まる」
- * 「いろいろな人（国籍・人種を問わず）との交流の深さに気づけたこと」
- * 「参加しなければ気づかなかったこと、出会えなかった人と出会えたこと、その後いろいろなイベントに参加するようになった。物怖じせず、チャレンジできる積極性が身についた」
- * 「国際協力と別の道を歩んでいるが、今の仕事に本気で取り組むことができるのも、多くの人々と出会い、人間として少しずつ成長して聞くことができたからです」
- * 「同じ志を持つ同期や先輩に会って話を聞くことは、将来について自分も何か行動しなくてはいけない、という緊張感をもらえた」

4. 気づき・視野の広がり

《自分の関心のありか》

- * 「自分が何に興味を持っているか、はっきりわかった」
- * 「大学の勉強や日常生活の中でなかなか考えることのできないテーマを身近に感じ、考えるきっかけができた」
- * 「国際機関で働く人から直接話しを聞くことができ、実際に内部に入って働くことで、敷居の高かった国際機関が身近なものになり、自分でもできる国際協力・国際交流が意外とあることに気づいた」

《自分自身について》

- * 「自分自身の長所、短所、普段きづかなかった自分の一面や、愚かさに気づくことができた」
- * 「受身にならず、自分で目標を作ることの大切さを知り、自分にその能力が足りないことを学んだ」
- * 「意識が高く、経験・知識が豊富な方々との交流により、自分の意識改革ができた」
- * 「自分が積極的にさえなれば、さまざまな経験できることがわかった」

《自分にもできること》

- * 「国際協力を実現する過程で、企業と NPO とのつながりや、一般の市民が問題意識や関心を持ってもらうことの大切さを知り、国際協力の啓発活動の大切さを学んだ」
- * 「国際機関の職員との対話から、自分の可能性を最大限に活かし主体的に動くことの大切さを知った」

《広い視点の獲得について》

- * 「実際に国際機関で働くことで、本や他人から聞く国際協力の理解を相対化して考える材料を得た」
- * 「国際的にも幅広く活躍されている方々と実際にお話ができ、ともに活動できたことで、幅の広い意見や考え方を学べた」
- * 「知らないことを知ることで自信が付き、今後のモチベーションにつながった」
- * 「普段接することのできない世界を体験した」
- * 「社会経験ができたことで、立場を多角的に見ることができた」
- * 「現場を見ることで価値観が大きく変わった」
- * 「国際化している国内の現場を見て、途上国とのつながりや日本の課題を知ることができた」
- * 「国際協力というフィールドで活躍されている人々と繋がりを持てたことで自分の視野が広がった」
- * 「今まで国際協力は、途上国の現場で働くイメージが強かったが、国内で国際協力ができる仕事、国際機関以外にも民間企業や NGO・NPO 等、国際協力の多様な携わり方を知り、視野が広がった」
- * 「国際機関は華やかで実力主義というイメージが先立つが、研修先は、非常に和を重んじた環境であることがわかった。研修後も食事に行ったり、情報交換する機会が持てる関係が作れたこともよかった」
- * 「普段の仕事の中では考えない視野が広がり、もっと国際社会に貢献したいと思うようになった」
- * 「米国人の学生達と交流する中で、人生設計の違いを感じ、世界を見る幅が広がった」

5. スキルの習得・実務能力の向上・知識の獲得

- * 「国際協力に関する知識や考えも増え、自分の軸、核となった」
- * 「国際的な研究をしている研究者の補助をすることで、具体的に役立つ技術の習得ができた」
- * 「事務処理能力やプレゼンスキルの向上、広報・電話対応、資料作成などの実務を学べたことが大学での勉強や実際に社会に出て大変役立っている」
- * 「コミュニケーションの重要性、一般常識、会社での態度が実際に社会で働く方と一緒に行動することで勉強になりました」
- * 「会議準備等のロジスティックスを学ぶことができ、会社での仕事に役にたっています」
- * 「国際的な研究をしている研究者の補助という普段できない仕事を体験でき、具体的に役立つ技術の習得や将来に対する良いモチベーションを持って、将来について深く考える機会となった」
- * 「国際機関の特徴や役割、国際協力の現場や現状を知ることができ、理解を深められたこと」
- * 「大学院で日本語教育を専攻していたので、研修先で日本語でいかに伝えるか、どのテキストを使い、どんな補助教材を用いているかを見ることができたことは非常に貴重な体験だった。また、自分自身の日本語・日本文化への興味が深まり、専門分野の知識と自信を身につけることができた」
- * 「専門的な英語の語彙力が身につきました」
- * 「細かいことにとらわれず、大局を見て考える視点を研究機関で学び、現在の職場で役にたっている」

6. キャリア・進学・将来の進路

- * 「卒論のテーマ、将来の進学先と出会えた」
- * 「国際機関で働くことを目標にしていたが、その決意を固められ、方向性を決めるターニングポイントになった。そのことで、大学生活の方向性も決まった」
- * 「実際に国際的な研究を行っている研究者の補助という普段では全く体験できない活動ができたことで、将来のことについて深く考えることができるようになった。将来に対する良いエネルギー、モチベーションをもらえた」
- * 「大学1年生で参加できたことは非常に幸運で、その後、大学でのサークルの立ちあげや、留学、日本研究センターでボランティアもさせてもらい、留学先では日本語クラスのチューターもさせてもらうことができた」
- * 「自分が今後できる国際協力の分野、進路選択できる分野が見つかり、大きな後押しになった」
- * 「大学での理論を実践として体験できたことも非常に有意義。その後の大学生活で「行動」につなげることができた」
- * 「世の中には、いろいろな仕事があり、可能性があると感じられたこと」
- * 「研修先に、若手研究者やビジネスのキャリアの一環として留学している学生もおり、彼らとの議論の中で、自分は学術よりも、ビジネスの世界に向いているということがわかった」など

✧ 受入協力機関一覧 ✧

	<p>国際連合食糧農業機関 (FAO)日本事務所 国連組織の中で最大専門の機関である FAO は、農業開発と栄養改善を促進し、食料安全保障を追求する事により、世界の貧困と飢餓撲滅に取り組んでいます。 ●http://www.fao.or.jp</p>
	<p>国際連合大学高等研究所(UNU-IAS) 国連のシンクタンク、学者・研究者の国際的共同体として、人間の安全保障と発展に関わる緊急かつ地球規模の問題解決に、学術研究と能力育成を通じて寄与することを使命として活動している国連機関です。 ●http://www.ias.unu.edu/</p>
	<p>アメリカカナダ大学連合日本研究センター (IUC) IUC は日本学を専攻する大学生・院生に対して上級日本語教育を行うために設立された研究機関です。卒業生は母国と日本の架け橋として世界各地で活躍し、日本に対する理解を深めることに貢献しています。 ●http://www.iuc.japan/org</p>
	<p>独立行政法人 国際協力機構 JICA 横浜 国際協力機構(JICA)は日本の政府開発援助の実施機関として開発途上国に対する協力を担う機関。JICA 横浜は神奈川県における JICA の拠点として、地域における国際協力と市民参加を推進する機関です。 ●http://www.jica.go.jp/yokohama/</p>
	<p>アジア太平洋都市間協力ネットワーク (CITYNET) アジア太平洋地域の都市や団体を会員に擁し、都市問題や都市づくりに関する技術や経験・情報等の交換を通して、より良い都市づくりをめざした国際協力を推進している非営利の国際組織です。 ●http://www.citynet-ap.org/ja/</p>
	<p>国連 WFP 協会 飢餓と貧困の撲滅を使命とする WFP 国連世界食糧計画を支援する認定 NPO 法人で、日本における WFP 国連世界食糧計画の公式支援窓口です。日本国内において世界の飢餓問題や WFP 国連世界食糧計画の食糧支援活動に関する情報提供、募金活動や企業・団体との連携を進め、支援の輪を広げています。 ●http://www.ja.wfp.org/jawfp</p>
	<p>アンスティチュ・フランセ横浜 (旧横浜日仏学院) アンスティチュ・フランセ横浜は、在日フランス大使館直属の公式文化・教育機関です。1990 年に横浜市との協力のもと横浜日仏学院として設立され、2012 年 9 月に全国の日仏が学院・学館が在日フランス大使館文化部と統合し、それに伴い名称を変更しました。 ●http://www.institutfrancais.jp/yokohama/apprendre/</p>
	<p>公益財団法人 横浜市国際交流協会(YOKE) 外国人が暮らしやすく社会参加しやすい多文化共生のまちづくり、グローバルに行動できる人づくり、市民活動の支援・連携促進、国際協力の推進などの事業を市民・団体・行政・関係各機関とともに進めている公益財団法人です。 ●http://www.yoke.or.jp/</p>

『国際機関実務体験プログラム OB・OG 追跡アンケート調査』 回答フォーマット

(注1) この情報は関係者と限られた目的以外には、使用しません。

(注2) OB, OG とは、「実務体験プログラム」を修了、もしくは今後修了する学生のことを意味します。

(注3) 情報公開の範囲について：YOKE 事務局では OB, OG ディレクター（仮称）を作成し、以下の情報について YOKE 事務局、出身大学事務局のみで、共有化することを予定しています。（※複数回答は可能）

Q1. 基礎データ

<input type="checkbox"/> 氏名 ふりがな (※YOKE で記載)	性別	<input type="checkbox"/> 研修時の情報 ①研修年度・研修先機関名： ②研修時の所属大学・学部・学年： (※YOKE で記載)
<input type="checkbox"/> 現姓		
<input type="checkbox"/> 現住所：〒	<input type="checkbox"/> 連絡先 TEL： <input type="checkbox"/> 携帯 TEL： <input type="checkbox"/> Email アドレス：	
現在の状況に関する質問：以下のチェックボックス項目については、該当箇所を必ず黒でぬりつぶしを入れて下さい。その他の部分については、全て自由記載です。		
※就業中の方 (1) ジャンル <input type="checkbox"/> 会社員： <input type="checkbox"/> 公務員： <input type="checkbox"/> 教員： <input type="checkbox"/> 大学職員： <input type="checkbox"/> NPO・NGO 職員： <input type="checkbox"/> 自営： <input type="checkbox"/> その他：	※就学中の方 (1) 所属 <input type="checkbox"/> 博士課程： <input type="checkbox"/> 修士課程： <input type="checkbox"/> 学部： <input type="checkbox"/> その他専門学校等：	※その他に該当する方 <input type="checkbox"/> 就活中 <input type="checkbox"/> その他
(2) 所属先名称： (3) 担当部署・業務内容：	(2) 専攻等研究テーマ： (3) 所属先名称：	4. 現在ボランティア活動をしていますか？ (1) 有無 <input type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> していない (2) 所属団体名： (3) ジャンル・内容：

Q2～Q6:『一般質問』「実務体験プログラム」と現在の職務や学業との関係性に関する問いです。

Q2-(1)「実務体験プログラム」への参加は、その後の大学生活に影響がありましたか？

大いにある 多少ある 普通 あまりない 全くない

【コメント】

Q2-(2). 上記で「大いにある」、「多少ある」と選択した方は、どのような影響だったでしょうか？

ゼミの選択：

卒論のテーマ：

サークル活動やボランティア活動：

インターンシップ：

留学：

その他：

【コメント】

Q3-(1)「実務体験プログラム」への参加は、大学卒業後の進学等就学の選択に影響がありましたか？

大いにある 多少ある 普通 あまりない 全くない

【コメント】

Q3-(2). 上記で「大いにある」、「多少ある」と選択した方は、どのような影響だったでしょうか？

学校の選択：

専攻の選択：

その他：

【コメント】

Q4-(1)「実務体験プログラム」への参加は、大学卒業後の就職の選択に影響がありましたか？

大いにある 多少ある 普通 あまりない 全くない

【コメント】

Q4-(2). 上記で「大いにある」、「多少ある」と選択した方は、どのような影響だったでしょうか？

就職先：

業種の選択：

職種の選択：

その他：

【コメント】

Q5. 具体的に「実務体験プログラム」のどのような業務内容が、現在の職場や学業・研究面での活動に役に立ちましたか？

コミュニケーション能力（挨拶、職場での伝言、周囲との調和等）：

礼儀・言葉遣い・周囲への配慮等：

時間管理：

- 事務処理：
- 調査：
- 提案・企画：
- 広報活動：
- イベント・会議運営：
- プレゼンテーション：
- 報告書作成：
- その他：
- 【コメント】

Q6-(1)「実務体験プログラム」終了後、国際交流・協力活動や企業のCSR活動、ボランティア活動（国内・海外）等に参加したことがありますか？またどのようなことがきっかけでしたか？

- ある
- ない

Q6-(2)「上記で「ある」と回答された方は、以下について教えてください。

- 具体的な時期・期間・回数：
- 内容：
- きっかけ：
- 【コメント】

Q7～Q8:『一般質問』国際機関と学生との関係性についての問いです。

Q7-(1)「実務体験プログラム」でお世話になった受け入れ機関やYOKEを含む他の機関と今でも関係を持続していますか？

- はい
- いいえ
- どちらとも言えない

【コメント】

Q7-(2)上記で「はい」と回答した方へ伺います。どのような形で、研修先とつながっていますか？

- アルバイト：
- インターン：
- ボランティア：
- 会員：
- セミナーやシンポジウム、イベント等への参加：
- その他：
- 【コメント】

Q7-(3)研修先やYOKEとつながることで、どのようなメリットがありますか？また、どのようなことを期待しますか？

- 情報収集（研究や関心あるテーマ等 就職、就学、留学等）
- 人間関係などネットワークの構築
- その他：

【コメント】

Q8-(1) 今後とも国際機関の活動に関わりたいと思う気持ちがありますか？

ある どちらともいえない まったくない

【コメント】

Q8-(2) 上記で「ある」と回答された方に伺います。今後どのような形で貢献できると考えますか？

- セミナーやイベントに参加：
- セミナーやイベント運営へのボランティア協力：
- 社内や学内に講師を招くセミナー等の開催：
- 啓発のためのポスター展など広報の協力：
- 社内・学内等での募金活動：
- 自身の体験談を語る講師として協力：
- その他：

【コメント】

Q9:『一般質問』「実務体験プログラム」同期、OB,OGとの関係性について

Q9-(1) 同期や先輩・後輩の学生との連絡は続いていますか？

とてもよく連絡をとっている はい 時々 まったくない

【コメント】

Q9-(2) 同期や先輩・後輩の学生との交流は、どのような意味を持つでしょうか？

- 情報交換（就職、就業、留学体験等）
- 興味や関心がある話し合える友人やアドバイザー的存在
- その他：

【コメント】

Q10. ~Q12. :『一般質問』プログラム全体のまとめの問いです。

Q10. あなたにとって「国際機関実務体験プログラム」に参加して一番良かったと思えることは何ですか？

Q11. 「実務体験プログラム」について、今後の発展のために、改善点や提案をお知らせ下さい。

Q12. 後輩学生にメッセージがあれば、記載下さい。

ご協力をありがとうございます。皆様の今後の活躍に期待しています。

◆「国際機関実務体験プログラム修了者派遣実績一覧リスト」

(受入れ機関)

大学 年度	明学	横国	フェリス大	市大	合計	YOKE	FAO	UNU	IUC	JICA	CITYNET	WFP 協会	日仏学院	合計
H16 春期	3名	—	—	—	3名	1名	1名	—	—	—	—	1名	—	3名
H17 夏期	3名	—	—	—	3名	1名	1名	—	—	—	—	1名	—	3名
H17 春期	3名	2名	2名	—	7名	1名	1名	2名	—	—	—	1名	2名	7名
H18 夏期	3名	3名	2名	—	8名	1名	—	1名	1名	2名	—	1名	2名	8名
H18 春期	3名	1名	2名	1名	7名	2名	1名	2名	1名	—	—	1名	—	7名
H19 夏期	3名	3名	2名	—	8名	2名	1名	2名	—	2名	—	1名	—	8名
H19 春期	4名	2名	0名	1名	7名	1名	1名	2名	1名	—	1名	—	1名	7名
H20 夏期	3名	3名	0名	1名	7名	1名	1名	1名	2名	1名	1名	—	—	7名
H20 春期	2名	2名	0名	1名	5名	1名	1名	1名	1名	—	1名	—	—	5名
H21 夏期	2名	2名	1名	2名	7名	1名	0名	1名	1名	3名	1名	—	—	7名
H21 春期	2名	2名	0名	1名	5名	1名	1名	1名	1名	—	1名	—	—	5名
H22 夏期	2名	2名	2名	2名	8名	1名	1名	1名	1名	3名	1名	—	—	8名
H22 春期	2名	1名	1名	1名	5名	1名	1名	1名	1名	—	1名	—	—	5名
H23 夏期	2名	2名	1名	2名	7名	1名	1名	1名	1名	3名	0名	—	—	7名
H23 春期	3名	0名	1名	1名	5名	1名	1名	1名	1名	0名	1名	—	—	5名
H24 夏期	2名	2名	2名	2名	8名	1名	1名	1名	1名	3名	1名	—	—	8名
合計	42名	27名	16名	15名	100名	18名	14名	18名	13名	17名	9名	6名	5名	100名

●編集・発行者：公益財団法人 横浜市国際交流協会（YOKE）

●発行日：平成25年3月

●連絡先：〒220-0012

横浜市西区みなとみらい1-1-1

パシフィコ横浜、横浜国際協力センター5階

公益財団法人 横浜市国際交流協会（YOKE）

TEL：（045）222-1174

Email：yoke@yoke.or.jp

●無断転載厳禁